



特別展記念講演会

特別展会期中の11月17日(日)、早稲田大学文学部大学院准教授の成澤勝嗣氏をお招きし、記念講演会を開催しました。「南蛮屏風に描かれた都市の賑わい」と題されたこの講演会では、成澤氏がかつて22年間勤められていた神戸市立博物館が所蔵する狩野内膳の南蛮屏風について、最高級の絵の具が使われていることや、豊臣秀吉と関わりのあるモチーフが数多く描かれていることなど、細かい証拠を示されながら、それが豊臣家によって描かれたものであることを言及されました。

絵師の内膳は、もとは戦国大名荒木村重の家臣の子で、ある時、彼の描いた絵が秀吉の目にとまり、狩野派に入門させられ、「狩野」の名字の使用を許される重要な弟子の一人に成長しました。その後、豊臣家のお抱え絵師となり、豊臣家の栄華を寿ぐ風俗画「豊国祭礼図屏風」などを描いています。この屏風絵は、秀吉の七回忌にあたる慶長9年(1604)秀吉を慕う京都の町衆たちが同じ衣裳で着飾って踊った、当時「風流」と呼ばれた踊りの様子を記録するために描き、慶長11年に豊国神社へ奉納したもので、亡き秀吉、さらには豊臣家をアピールするための風俗画としてあったと述べられました。同じ内膳による南蛮屏風も豊臣家賛歌という性格を持ったものであると語られました。

南蛮屏風に描かれたカピタンモールの衣裳やアラビア馬、パラキーンと呼ばれた象の詳細な描写は、天正18年(1590)秀吉に謁見した巡察使バリニャーノ一行や、このときに献上された馬・象がもとになっていること。また、象やそれを調教するために使われる鷹口の正確な描写も慶長2年(1597)にスペイン政府によって大坂城の秀吉の所へ連れて来られたドン・ペテロと呼ばれる象がモデルとなっていること。これらの出来事を内膳が実見したとみられ、このほかにも、フランススコ会宣教師の清貧・純潔・服従を表す縄帯の三つの結び目や、詳細なキリスト教に関する風俗、グレイハウンドという猟犬などにも実見にもとづく描写がうかがえると話されました。

秀吉は贈られたパラキーンを大変気に入り、ハレの場所で度々これを使用していました。また前述の象を京都に居る天皇にも見せ、その道中でいろんな人がこれを見ていることなどから、この南蛮屏風を見た当時の人々に、豊臣家に関連するものが多く描かれていることをおそらく気づかせたであろうとも言われました。こうしたことから、この南蛮屏風は、豊臣家のお抱え絵師であった内膳が豊臣政権の国際性を表現したものであり、またその制作時期は、秀吉のもとに象が着いた1597年から、内膳が亡くなる元和2年(1616)の間に想定できるそうです。

ふれあい歴史体験講座

- 定員 各回70名程度(先着順)
- 時間 午前の部 9時30分～(約2時間)  
午後の部 14時00分～(約2時間)



	実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
第15回	2月1日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	1月19日(日)
第16回	2月15日(土)	粘土はにわ作り	午前・午後	220円	2月5日(水)
第17回	3月1日(土)	管玉・丸玉作り	午前・午後	260円	2月19日(水)
第18回	3月22日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	3月5日(水)

応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。  
(大分市歴史資料館：097-549-0880)

テーマ展示解説講座

内容 講座室でテーマ展示Ⅲ「大分の土器48選」について、スライドなどで解説した後、展示会場を案内します。

日時 1月26日(日) 14時～15時30分

参加費 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

★上記の各講座に参加した方は観覧料が無料になります。



講演風景

内膳によって考案されたこの南蛮屏風は、その後、この構図を用いながらもキリスト教的なものが排除され、国際交易を中心とした南蛮人交易図といえるものに変化し、さらに南蛮人より中国人が多くなり、江戸時代の鎖国下の長崎貿易をイメージしたものへと変わっていったと述べられました。

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日 但し祝日の場合は開館  
但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日  
祝日の翌日 但し土・日曜の場合は開館  
年末年始 12月28日～1月4日



- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)  
中学生以下 無料 ※団体は20名以上  
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。  
◎入館時に受付で手帳を提示してください。



- 交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分  
大分バス【国分新町ゆき】 歴史資料館入口下車 徒歩5分  
大分自動車道 大分I.C・光吉I.Cよりともに約15分



発行日：平成26年1月24日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880 FAX097-549-5766

※大分市ホームページの「観光・魅力>歴史・文化財>歴史・文化を学ぶ>大分市歴史資料館」も併せてご覧ください。  
(http://www.city.oita.oita.jp/)

# 大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

## ニュース

vol. 105  
2014.1.24



穴のあいた土器(弥生時代後期) 丹生川坂ノ市条里

大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅲ

Oita no DoKi 48 sen

# 大分の土器48選

2013年12月21日(土)～2014年3月30日(日)

# I 縄文の器

JOMON WARE



今からおよそ1万5千年前、温暖な気候への環境変化にともない、木の実を食料とする生活がはじまり、これを食べるために土器が発明されたと考えられています。この時代の土器は、縄の目の文様(縄文)が施されたものが多いことから「縄文土器」と名付けられ、この土器が使われた時代を「縄文時代」と呼んでいます。縄文土器は長い時間の中、日本各地で多様な個性的なものが作られました。

大分の縄文土器は、東日本地域に比べてシンプルな形・文様のものが多いのが特徴です。またそれぞれの時期において、生活の変化や他地域との交流の中で土器が変化していることがわかります。

# II 弥生の器

YAYOI WARE



弥生時代になると西日本を中心に稲作が広まり、人々の生活は食料の採集から生産へと変わっていきました。こうした変化にともない、米を煮炊きするための甕や貯蔵用の壺、五穀豊穰を願うマツリなどに使用されたと考えられる器台などの土器が作られはじめました。これらの土器は、縄文土器に比べ、赤く焼きあがり、模様などが少ないのが特徴で、最初に発見された東京本郷弥生町の地名にちなんで「弥生土器」と名付けられました。

大分の弥生土器は、稲作とともに北部九州から伝わり、その後、独自に発展していきました。そして下城式土器や安国寺式土器と呼ばれる独特な土器が作られるようになりました。

## テーマ展示Ⅲ

Oita no DoKi 48 sen

# 大分の土器48選

2013年12月21日(土)～2014年3月30日(日)

歴史資料館の展示品の中で一番多いのは、遺跡の発掘調査によって出土した「土器」です。土器は粘土で形を作り、これを焼いたもので、およそ1万5千年前に誕生したといわれています。日本の土器は、世界で発見されているものの中で最も古い歴史をもっており、長い時の中で人々の生活とともに変化してきました。土器の形や文様は、それぞれの時代や地域の特性をよく表しており、土器を研究することで、当時の人々の暮らしぶりや地域間の交流などがみえてきます。

今回の展示では、大分で出土した特徴的な48の土器を選んでいきます。これらの土器から歴史的背景や土器自体がもつ美や芸術性を感じていただければと思います。

# III 古墳の器

KOFUN WARE



古墳時代になるとヤマト王権の影響により、近畿地方のさまざまな文化や技術が日本各地に広がりました。土器もその1つで、この時代以降、「土師器」と呼ばれる素焼きの土器が各地で作られました。作り方や焼き方などは弥生土器と同じですが、全国に一気に広がり、地域をこえた共通のものが作られるようになったことから、弥生土器とは区別されています。

また、古墳時代中期には、朝鮮半島から渡来人によって伝えられた「須恵器」も新たに作られるようになりました。須恵器はロクロを使って成形し、登り窯の中で1000℃以上の高温で焼きあげる硬質の土器です。高温で焼かれたため硬く焼きしまり、灰色をしているのが特徴です。

## 【表紙紹介】穴のあいた土器

## VI 祭祀の器

遺跡からは、土器の一面に小さな丸い穴があいたものが出土することがあります。こうした土器は、石棺墓などのお墓の周りで発見されることが多く、葬送の儀式や祭祀に用いられた器と考えられています。

これらは、煮炊きや貯蔵具、食器として日常生活に使われていた土器で、本来の用途から別の用途に用いられたものです。

# IV 古代の器

KODAI WARE



7世紀後半になると律令制が整い、中央集権的な国家が形成されました。このことは、生活習慣にも大きな影響を及ぼし、それまでになかった種類の土器(食器)が登場しました。古代の土器は、土師器と須恵器が中心で、これに黒色土器、奈良三彩や緑釉陶器、輸入陶磁器といったものが加わりました。都の土師器や須恵器は、佐波理鏡などの金属器をまねて作られたもので、大分市内でも極わずかですが出土しています。これは地方に派遣された国司などの役人によってもたらされたものと考えられます。一方、大分でも都の土師器をまねたものが作られており、都への志向・憧れを感じることができます。

# V 中世の器

CHUSEI WARE



中世前期、中国から白磁や青磁といった輸入陶磁器が全国各地に流通すると、その影響を受けた土器が生産されました。畿内を中心に作られた「瓦器」はその代表的なものです。また、土師器も作られ続け、中世では杯や皿などの食器を「土師器」と呼び、鍋や鉢などの調理具を「土師質土器」と呼び分けています。大分から出土する土師器は、ロクロ成形したものが大半で、時折、「京都系土師器」と呼ばれる手づくねで成形されたものも出土することがあります。この京都系土師器や和泉型瓦器は、都との関わりを強く示す土器といえます。これらは、国衙領(国の直轄地)や大分に荘園を領有する貴族や寺社によってもたらされたものと考えられます。